

文京人



文京区立小日向台町小学校

文京人インタビュー

公益社団法人 文京区シルバー人材センター／前会長

おがわ ちえこ

雄川千枝子さんに聴く

自分なりの働き方で

地域貢献を

——文京区シルバー人材センターで働くことになったきっかけを教えてください

シルバー人材センターに入会しまして、20年になります。

その前は蓬萊町（現在の向丘）で夫の実家がパン製造業をやっていましたので、結婚後ずっと一緒に働いていました。昔ですから、住み込みの職人さんがいらっ

しゃった頃からです。学校の給食のパンも作っていたのですよ。

夫が亡くなり下の子どもが社会人に

なったのを機会に店を整理しました。それが60歳の時でした。しばらくはゆっくりしていたのですが、何か活動をしたたい気持ちが出てきたところで、シルバー人材センターの存在を知りました。

もともと働くことは健康につながると

考えていたことと、新しい世界を見たいという思いもあり、早速入会しました。

——今、80歳とお伺いしました

はい、80歳の壁を越えました。これまで会長職もしていましたが、一登録会員としても働いています。80歳を超えても会員としてお仕事できます。今は80歳な



んで本当に若いと思います。

フレイル予防を70歳ぐらいから始めて、ずーっと元気でいられる様に体操したりして過ごしていけたらいいと思いますね。今も仕事を通じて健康的な生活が送れていると思っています。

——文京区シルバー人材センターの歴史や活動内容を教えてください

1977年に高齢者事業団として都内で11番目、23区で5番目に文京区役所内でスタートしました。そして1990年に社団法人になり2011年に公益社団法人化しました。

会員は2023年9月現在1331名です。他の区と比べて女性の方が多いことが特徴です。平均年齢は女性が74歳、男性が76歳です。法律に基づき「月10日程度、週20時間未満」という枠内で就業が行われます。

——具体的にどのようなお仕事があるの

でしょうか

文京区内の様々なお客様（企業・団体・個人）からお問い合わせを毎日いただくので、その中で高齢の方でもできるような仕事を選ばせていただいています。

施設の受付業務、家庭のお手伝い、清掃、生活支援、事務、福祉分野、技能（植木剪定、障子の張替えなど）です。この頃は、小さなお子さんがいる若いご夫婦のご家庭で、ご飯を作ってほしいというようなご希望もあります。

——会長職になられた経緯はなんでしょうか

最初は普通の会員として、区民会館での受付や、ご家庭の家事援助や着物の着付け、イベント会場での案内など数多くのお仕事を経験しました。先輩の言葉で「まずは、現場を知りなさい」と言われたことがきっかけで、どんなお仕事もチャレンジするという気持ちで活動をしてき



ボランティア活動にて仲間と一緒に



会員募集活動の様子

ました。その中でグループのリーダーの経験を積んで、皆さんに推薦いただいて、だんだん役職になった、という経緯ですね。

最初は理事や会長の仕事はとてもしが、ないとお断りをしていました。ですが、ある職員の方に「何かあったら事務局を頼ればいい」と声をかけていただいたことがきっかけで、引き受けることにしま

した。

——会長のお仕事はどのような内容ですか

皆さんの中に入って声を聞いたり、お仕事の内容や環境について話しあったりしています。シルバー人材センターで受注しているお仕事それぞれに、担当理事さんがいます。その場所に行つて、「会員さんがどうしたらお仕事がしやすいようになるだろうか」とか「何かしてほしいということがあるだろうか」とか、いろいろなお話を聞いて、寄り添いながらやってきました。

そして、会長職を6年努めました。事務局の皆さんが一生懸命サポートしてくださって、本当に助けられました。

——今までどのようなご苦労がありましたか

初めてのことは全てが手探りで前に進

みました。会長になってからも、最初は会議の出席や理事会などの司会進行で手一杯でした。

徐々に慣れてくると、会員数を増やすにはどうすればよいか、会員の皆さんが満足できるセンターにするにはどうすればよいか、などを考えるようになりました。

そして、女性が興味を持ちそうなセミナーを女性委員会中心で企画して仲間を



着付け教室の様子



オリンピック記者会見場用の紙飛行機制作の様子



Profile

雄川 千枝子さん

昭和 17 年東京都大田区生まれ。

23 歳で文京区に転居。平成 15 年 1 月、文京区シルバー人材センターに入会。文京区内の会議室管理を中心に、個人のお宅の家事援助や着付けのサポートなど多岐に渡って就業する。仕事別グループサブリーダー（平成 21 年～平成 24 年）、安全対策推進員（平成 23 年～平成 25 年）、理事（平成 25 年～令和 5 年 6 月）、仕事別グループ総括理事、女性委員会委員長（平成 27 年～平成 29 年）、会長（平成 29 年～令和 5 年 6 月）等、様々な役職を経験。

趣味：手芸



雄川さんと「文京人」編集部

公益社団法人
文京区シルバー人材センター
〒112-0003 東京都文京区春日 1-16-21
文京シビックセンター 4F
☎03-3814-9248 📠03-3811-9100

増やしていききました。講師は私たち会員が担当しています。手芸教室、着付け教室、また、外部講師によるネイル教室、缶詰のお料理教室などたくさんのお教室を開催しました。

私は、手芸が好きだったから教室のお手伝いをするのを苦には思わなかったですよ。SDGsの一環として、うちにある着物をほどこいてアクセサリを作ったこともあります。介護のセミナーも開催しました。

請負でシルバー人材センターのメンバー 10 人ぐらいで一生懸命にオリソニックの記者会見場のブルーと白の紙飛行機を全部くくりつけて飾ったのです。

——これから始めたいという方々へメッセージをお願いします

「ありがとう」という嬉しい言葉をいただけるのが、シルバー人材センターのお仕事です。私も、魔法のようにエネルギーを与えてくれるこの言葉を励みに活動

続けてきました。

健康で働く意欲のある 60 歳以上の方ならどなたでも会員登録出来ますので、まずは入会説明会へご参加ください。経験のない人には研修制度もありますので、新しい分野のお仕事にもチャレンジしてほしいと思います。

自分なりの働き方で地域貢献をしたいという高齢者の方々を、私たちがお互いに支え合ってお仲間を増やしていきたいと思えます。ぜひ一緒に地域を盛り上げていきましょう。



【小日向で4代続く老舗豆腐店】

くまきち
小林久間吉豆腐店

小林秀一さん

「好き」を努力で楽しむ
4代目が作る豆腐の味

閑静な小日向の住宅街の一角に110年続く豆腐屋さんがある。小林久間吉豆腐店だ。今の店主は4代目の秀一さん。久間吉と言う屋号は、2代目のお名前だそう。戦争から無事帰還し、豆腐店を再開した久間吉さんの名前を「戦争はいけないこと。平和を願う意味も込めて」つけた。

秀一さんの経歴は、異色だ。1993年に東京工業大学理学部地球惑星科学科に進学。入部したボート部で銅メダル。卒業後、家業を継ぐ傍らボクシング

を始めた。たまたま観たレパード玉熊選手のファイトに感銘を受けて、彼のジムの門を叩く。1998年にプロデビュー、翌年には全日本新人王、更に2003年に日本ウェルター級チャンピオンまで登り詰める。「豆腐店って朝早いんですよ？」と尋ねると、「朝1時に起きて、それから仕込みをして6時には開店。そして午後にはボクシングジムに通っています。その頃は父親も健在でしたからね。午後にはボクシングをやらせてもらっていたんですよ。」と、事もなげに答えたが、

ボートもボクシングも経験0から始めて数年の業績と言うのだから驚く。

宇宙とスポーツが好きで秀一少年は、宇宙飛行士が運動選手になりたかった。豆腐屋にはなりたくなかった。休みに店の手伝いをして豆腐屋が大変な仕事というのがわかっていたから。特に冬は。しかし、バブルがはじけ景気が悪くなるに伴い従業員も減っていくのを見て、父母の負担を減らそうと大学卒業後（1997年）に豆腐屋になり、創立100周年（2013年）の年に4代目店主を継いだ。しかし、4代目は空を見上げることは止めなかった。チャンピオンになったファイトマネーで天体望遠鏡を購入し、次のファイトマネーで更に性能の良い反射式の天体望遠鏡を硝子板を削って自分で製作し、豆腐店の屋上に据え付けた。見えすぎてどこを見ているのかわからないくらいの性能だ。自分だけではもったいないと、友達を呼び、子ども達にも見せたいと天体観測会を立ち上げた。コロナ禍になって観測会をやられて



豆腐製造の様子。季節や毎日の気候に合わせて調整する。

いないが、そろそろ再開する予定。その時は店頭に貼り紙が出るはずだ。

コロナ禍で数カ月、小学校、中学校の給食がストップし、学校はもちろん飲食店にも豆腐を売る事が出来ない日々が続いた。しかし、店頭での販売は伸びた。3・11の震災の時もそうだった。「近所の人に助けられました。商売が危うい時にこんなに近所の人が買いに来てくれる。うちが110年続いているのはこういう

ことなんだなって、すごく気づかされた。近所の人に愛される秘訣？お客さんとよく話すことじゃないかな。」と、秀一さん。新しいお客さんとも積極的に話をして、コミュニケーションを取る努力をしている。

おすすめの商品は？と伺うと、看板商品の焼き豆腐。今も七輪の炭火焼きで丁寧に2個ずつ焼いているそうだ。「基本的に毎日目指している豆腐の硬さがあります。気温や豆乳の濃さなどでも変わってきます。その辺のいろんなことを調整して、目指す豆腐になるようにするわけ



初代から引き継がれた焼き豆腐の製造方法



小林久間吉豆腐店
〒112-0006
文京区小日向3-7-3
☎03-3941-2535



です。やっぱり豆腐作りは面白いですよ。昔はデパートに入ったりしてたけど、ここで、しっかりと、地域と結びつけることを続けたいなということが目標ですね。目標というか、ずっと前からそうなのですけど。」そして、続けた。「私は運が良かったのかもしれない。好きなことがちゃんと通り過ぎずに来てくれて。」と。好きなことをとことん追求し、継続する努力を惜しまない、そんな4代目が作る焼き豆腐で夕飯に肉豆腐を作った。丁寧に心がこもった豆腐は、腕をあげた気にさせ、日本酒がいつもより進んだ。



採蜜器では蜂蜜を巣から分離

門番、女王バチのお世話などの仕事をしますが、オスバチは働かず巣の中でぐうたらしています。

そんなミツバチの生態などについて学んだあとは、お楽しみの採蜜。採蜜器からトロ〜りとハチミツが落ちてくると、子どもたちから歓声が上がります。そして最後は試食。採れたてのハチミツをクラッカーに載せてパクリ。「甘〜い!」「おいしい!」と大盛り上がりでワークショップは終了しました。

ミツバチは、花の蜜や花粉を集める過程で植物の受粉を媒介し、地域の緑を守るために欠かせない存在ですが、農業や除草剤、都市化などの影響で減少しています。「養蜂を通じて、環境教育や地域の人たちが一緒に活動できる機会を

作りたい。まずは安定してミツバチを育てられるような環境を整えることが目標です」と話す中川さん。「ミツバチを見ていると、巣を大事にして、自分の役割を懸命に果たすけなげさに心を打たれます」と、すっかり養蜂のとりこになっているようです。

同じ地域でミツバチを育てていても、季節や天候などによって、ハチミツの味は変わります。今回は、さまざまな花の蜜が集まった百花蜜でしたが、春は桜や柑橘の蜜の割合が多く、花の香りの強いフルーティーなハチミツになるそうです。この先、文京区でどんな味わいのハチミツが採れるのか、楽しみに見守っていきたいですね。
[取材者：城川佳子]



蜂蜜をクラッカーにのせて試食!

お知らせ!

2023年11月より、文京人編集部は『NPO法人 地縁の輪(ちえのわ)』地域メディアの所属となりました。『地縁の輪』は、文京の街に暮らす人、学ぶ人、働く人、遊ぶ人、みんなが地元のご縁でつながって、居心地の良い、ふるさと我が街を創っていくための環境づくりを活動としています。『地縁の輪』は文京区の皆さんの声に耳を傾け、人々が心をつなぎ支え合う暮らしやすい街となるような優しく温かい居場所を作っていきます。私ども文京人編集部は『地縁の輪』の広報を担うとともに、これまでと変わらず、文京区に関わり「文京区を愛する人」さらにはこれから「文京区を愛してくれる」方々に向けた情報発信をし、取材記事を通して文京区の人と地域をつなげていきます。どうか今後とも変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。



ビルの屋上などでミツバチを育て、ハチミツをとる“都市型養蜂”の取り組みが、各地で行われています。文京区内でも複数の市民グループが、養蜂にチャレンジ中。今年の春から活動を始めた養蜂チームが、夏休みにワークショップを開催すると聞き、取材しました。

ミツバチが飼育されているのは、小日向の高台にある民家の屋上ベランダ。ビールケース大の巣箱が3つ並んでいました。防護服を着て、まずは内検（巣箱内を点検してミツバチの成育状況や巣の様子を調べる作業）。作業しやすいように煙を焚いてミツバチに少しどいてもらってから、巣箱を開けます。巣箱の中には8枚の巣枠が入っており、中にはミツバチがびっしり。ブラシでやさしくハチを落とし、ハチミツ収穫用とミツバチ観察用の巣枠を取り出します。

作業の合間、スタッフの中川穰（なかがわみのる）さんに話を聞きました。中川さんは福祉

施設の職員で、この取り組みを聞いて養蜂に興味を持ったそうです。同僚の鈴木宏明（すずきひろあき）さんが自宅の屋上を提供してくれることになり、養蜂家の中村和央（なかむらかずお）先生の指導を受けながら4月初旬から活動を始めました。最初は順調で、ミツバチが元気に育ち、春の花のハチミツも無事収穫できました。

ところが、6月に自然の猛威に翻弄され、壊滅状態に。そこから何とか持ち直して、今回が2度目の収穫です。

場所を「障害者支援施設 リアン文京」に移して、ワークショップを開始。約30人が参加し、皆ミツバチの巣に興味津々。巣全体で1匹しかない女王バチを探そうと目を凝らしますが、なかなか見つかりません。この巣にいるミツバチは全員、女王バチの子ども。女王バチは多いときで1日2000個もの卵を産み、メスバチは全員が働きバチとなって子育て、エサ集め、巣の掃除、

週一回、巣箱の内部を点検



ミツバチの生態について学ぶ





「レジン」って何？ レジン ワークショップ 体験記

完成品は見たことがあったものの、どうやって作るかは全く知らないまま、知人に誘われてワークショップに参加してみました。

場所は地下鉄の江戸川橋駅から徒歩10分ほどの静かな住宅街の中にあるPLACE SUID O-1です。

講師は阿部宝子(あべ たかこ)さん。施設の放課後等デイサービスのクリスマス会で子どもたちへのプレゼントを作成しようとしたことがレジンを始めきっかけだそうです。同僚や先輩に教えてもらいながら1年目はキーホルダーを作り、2年目は子どもたちのイニシャルのアルファベットを作成したことで、レジンの面白さのとりこになっていったそうです。

この日はヘアアクセサリを教えていただきました。まず、出来上がりのイメージのデザイン作りからです。私は出来上がりを夜空に咲く大輪の花火のイメージにしました。

子どもたちのために
作ったキーホルダー



机の上にずらっと並んだカラフルでいろいろな形をしたパーツの中から、花火に合ったキラキラ光る粉と星の形のパーツを選びました。枠になった型にレジンの液体を入れてライトをあて固めます。その上に先ほどのパーツを並べてその上からまた液体を流しライトをあて固めます。何度か同じ作業をしながら層になるように固めていくと立体的なデザインが出来上がりました。二度と同じものは作れないオンリーワンの作品です。

ライトで固めるといっても液体は熱くはないので子どもさんでも取り扱いできます。むしろ、幼児さんや児童さんの方が斬新な発想で楽しい作品ができるのではないのでしょうか。おしゃべりしながら約1時間、楽しく過ごすことができました。

ワークショップは不定期に開催されているそうです。開催日はホームページでも知ることができますので、ぜひ覗きに行ってみてくださいね。

[取材者：窪田妙子]



レジン液を流し込む





金曜午後のワークショップ

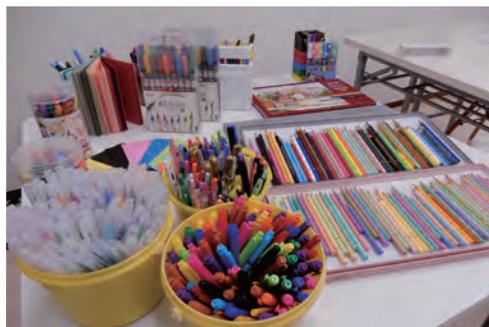
ちいさな芸術を 体験してみよう

スモールアートって何だろう?と地域の居場所PLACE SUIDO-1で開催されるワークショップへやってきました。

そこは色彩に溢れたアトリエでした。プロ仕様のホルベイン色鉛筆が全100色、SARASAボールペン全30色、筆ペン90色、水性サインペン40色、アートブラッシュ全色などなど、文房具マニアでなくても堪りません。

アートに詳しい星野ゆき路(ほしのゆきじ)さんが丁寧に教えてくれます。普段は福祉施設で働いているそうです。「誰がやっても思いがけず良い作品ができますよ。色鉛筆やボールペンは、絵具と違い扱いやすいので、早速はじめましょう」と言われ、私も挑戦してみました。ミニ葉書サイズの色紙を10色から選び、輪ゴムを載せて、ボールペンで輪郭をなぞります。いくつか丸を描いたら、あとは好きな色で塗っていくだけ。最後に色画用紙の台紙に貼って、15分程で完成。

素敵な作品を作りましたよ!



何百種類もの画材がずらり

コンパクトなので、手軽に持ち運べ、どんな場所にも飾れます。それぞれ個性が感じられ、温かみや人間的な魅力があります。まるで画家

のジョアン・ミロやパウル・クレーのような幻想的な抽象画に仕上がりますよ。

皆さんも是非立ち寄って体感してみてくださいね。

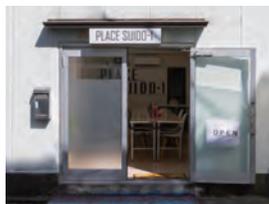
[取材者：一針源一郎]



輪ゴムを
なぞって描く

PLACE SUIDO-1

〒112-0005 東京都文京区水道2丁目5-11



開催日の詳細は
ホームページを
ご覧ください





がいのある子どもたちは、特別支援学校を卒業して社会人になると、大人の障がい者をサポートする社会資源の少なさから、人との繋がりが減少し孤立しがちになるそうです。そこで、余暇活動として仕事後の時間や休日に仲間と一緒にダンスや太鼓を習いました。それを地域のイベントなどで発表しているうちに「もっと誰かの役に立ちたい」という想いが強まってきたそうです。それから「Be-erin(ビーリン)」という名称で出張ボランティア集団を立ち上げ、これまでに地元町会のお祭りのお手伝いや出張販売など、様々な依頼を受けてきました。今回は駄菓子屋の販売の依頼があって出張してきたそうです。

いよいよ店開き。幼児を連れた親御さんが次々ご来店。小学生2人組が小銭を握って来たり、懐かしく思っか年配の男性も来店されました。

建物の外観は簡素ですが、中は明るく、手作りの三角旗やパネルが飾られて子どもの目が輝きます。奥へ進むと、棚にかわいい玩具と何種類

もの包装された駄菓子が並んでいます。アニメのお面もあります。

当てくじ(くじ引きで出た番号に応じて景品がもらえるもの)をやる人が一番多いそうです。お菓子の詰まった袋を手に、「楽しいからまた来たい。次はいつやるの」とみんな笑顔で店を出ます。子どもの欲しがるものが揃っていて、「次はあれを買おう」とまた来たくなるお店です。子どもは夢中で、大人は懐かしい、駄菓子屋へ行ってみませんか。

[取材者：村田正江]

PLACE SUIDO-2

〒112-0005 東京都文京区水道2丁目10-18



開催日の詳細は
ホームページを
ご覧ください





大人は懐かしく、子どもは夢中

駄菓子屋へ 行ってみませんか

地域の人々の交流と親睦の為に新しい拠点
PLACE SUIDO - 2では、「駄菓子屋を！」の声に応じて、令和5年5月5日から営業しています。

駄菓子屋は以前には、町でよく見かけていました。主に児童を対象に駄菓子、玩具を売る小売店で、子どもたちの社交場としての文化がありました。その後の少子化、遊び方の変化等により店の数が減ってしまい残念です。私もそうですが、小さい頃、駄菓子屋に通った人には思い入れがあります。また、当時を知らない若い世代の中には昭和レトロを新鮮に感じる人もいます。

開店前に拠点を訪ねると、店内では数人の若者が開店準備をしていました。店前で「駄菓子屋」ののぼりを立てている永井優歌（ながいゆうか）さんがこの日の束ね役と知り、詳しくお話を伺いました。

この活動には、2つの目的があるそうです。1つには、見守る大人がいる安心感の中で、子どもたちに買いもの体験や多世代間交流の場を提供すること。

この場所では、子どもが貰える小遣いの中で計算しながら買いものの楽しみを味わったり、年



齢層の異なる子どもや大人とおしゃべりをすることができます。

2つには、障がい者が活動する場の一つとすること。

開店準備をしていた若者は、知的障がいがある人たちでした。永井さんも普段は福祉施設の職員として働いているそうです。訳を聴くと、障



盛り上がる。

名画だけの鑑賞会ではない。障がいを持つ方が描いた絵も鑑賞した。おびただし文字と人物に重ね塗りをした絵を観て皆で感じたままを話し合い、作者を知っている参加者はその感想にうなづく。

小松さんは、長年、美術館などで鑑賞サポートの活動をしてきた。ある時、小学生と一緒にマクシミリアン・リュス作の《工場の煙突》を鑑賞した。「道徳の時間に、下を向くのは寂しいときと習ったから、この親子は寂しいと思う」「煙の色が違うのは、燃やす物によって違うと理科の実験で習った」など、ギャングエイジと言われる年齢の小学生が自分の体験から絵を読み解こうとする姿が印象的だったと話す。

ひとり静かに美術館で本物に触れることはもちろん大切な行為だが、今回のようにスクリーンに映し出された絵を皆で鑑賞しながら話し合ったり、家で家族や友人同士で語り合いながら観る絵も忘れがたい名画になると思う。なぜなら絵



を観て言語化し、他者と会話する行為は、自分と向き合う行為でもあるのだから。

次回、Café Tweedia など地域の憩いの場で同様の鑑賞会を開催する際には、是非参加して頂きたい。絵に興味のある方もない方も皆でじっくり絵と向き合い、語らい、心豊かな時間を共有することで、自分だけでは見えなかった新しい世界を見る快感を味わえる。

[取材者：大塚七生]

小松さんの話を伺う



Café Tweedia

〒112-0013 文京区音羽 1-2-18 1階
TEL:03-5940-2822



地域のだれもが気軽に立ち寄れる場所です。コーヒーやジュースなど400円程度





絵を観て 新しい世界を見る @ Tweedia

文京アートプロジェクトの小松一代（こまつかずよ）さんが主催するアート鑑賞会が、地域の憩いの場として新たにオープンしたコミュニティカフェ、『Tweedia (ツイ-デア)』で開催された。

テーマは、絵を複数の参加者で鑑賞し、気づいたことや感じたことなどをアルコール片手に皆で話し合うというものだ。

美術館に行くときキャプションを流し読みし、絵を数秒だけ観てわかった気になることがある。しかし、この会では、事前に絵に関する情報は全く与えられない。ものの本で知っている知識も先入観のように感じられる。なぜなら、複数人で話し合っていると新たな気づきと意外性があるからだ。

小松さんの「正解はありませんから否定は一切なし。皆さんの意見全てが正解です」の言葉か



ら会が始まった。ラ・トゥールの《ダイヤのエースを持ついかさま師》の鑑賞では、「いかさまをしている」と意見は合致したが、誰が騙していて誰がカモか意見が分かれた。アルコールが進むに連れて、そして肯定の頷きに力も得てか、皆の意見も面白くなってくる。エドワード・ホッパーの《ナイト・ホークス》では、店員の帽子が「板前に見える」「いや、モヒカンじゃないか」とか。確かにそう見えてきたりもして笑いが起きる。文字から地域を推察し、グラスの形状からカフェだと言う意見に、細部まで皆で目を凝らし、光の当たり具合から時間軸を想像し、登場人物のストーリーにまで話が及んだ。小松さんは、皆の意見が止まると、「音は聞こえますか？」などと更に想像力をかきたててくれる。最後に（世間での）絵の解説があり、皆で「やっぱり」だとか「そうなんだ」「いや、そうは見えない」と、また

絵画を前に皆の意見を引き出す小松さん



実際の絵を前に参加者方々の感想が飛び交う



■ 表紙の写真



小日向台町小学校は、戦前の1938年に建設されたとは思えない、おしゃれな丸い踊り場階段が特徴的で、すてきな眺望を楽しむことができます。



しれませんね。

取材に訪れた休日には、生徒一人一人が大事に育てている朝顔が、正門前にきれいに並んでいました。また裏庭にあるクラスごとの菜園に水やりに来ている親子も見かけました。

校舎の改築計画があり、シンボルとして長年親しまれてきた椎の木を抜根せざるを得ず、「お別れの会」を検討しているそうです。

■ 写真提供：文京区シルバー人材センター

／小林久間吉豆腐店（本文）

編集後記

文京区に住むミドルシニアによるミドルシニアのための情報誌第五号をお届けいたします。新メンバーが加入し、一層の誌面の充実、発行部数の拡大を進めております。

文京区を愛する人や、これから文京区を愛してくれる方々に向けて、人と地域をつなげたいという思いが「文京人」という誌名に込められています。

文京区ゆかりの人物インタビューでは、働くことは健康につながるからと、シルバー人材センターに入会し、20年以上も活動を続けてこられた方に伺いました。

魅力的な人物のいるお店紹介では、ボクシングのチャンピオンから転身した4代目が継ぐ、地元で愛される老舗豆腐屋を紹介しています。

今回は増ページの特集号として、「地縁の輪（ちえのわ）」の活動をいくつか紹介しています。蜂蜜づくり、手作りアクセサリ、スモールアート制作、駄菓子屋、ア

ト鑑賞会など、取材にいった編集メンバーも、思わず夢中になってしまったものばかりでした。

このような様々なイベント開催についての詳細は、ホームページやインスタグラムにてタイムリーに情報提供しております。

今後とも地域情報誌として、よりよく面白く発展していけるように努力してまいりますので、ご意見等がございましたら編集部までお電話またはメールにてお寄せください。

文京人に 広告を掲載しませんか

詳細は編集部までメールで
お問い合わせください。

文京区の人と地域をつなぐ情報誌

文京人（ぶんきょうじん）第五号

題字；上村正子

企画編集『文京人』編集部

発行：NPO 法人 地縁の和（ちえのわ）

発行日：2023年11月30日

お問い合わせ先：

社会福祉法人武蔵野会

文京福祉センター江戸川橋

電話：03-5940-2901

edogawabashi@team-lien.com

無断転載禁止

